

芥川龍之介

人物記



人
物
記

森先生

或夏の夜、まだ文科大学の学生なりしが、友人山宮允君と、観潮楼へ参りし事あり。森先生は白きシャツに白き兵士の袴をつけられしと記憶す。膝の上に小さき令息をのせられつつ、仏蘭西の小説、支那の戯曲の話などせられたり。話の中、西廂記と琵琶記とを間違え居られし為、先生も時には間違わるる事あるを知り、反って親し

みを増せし事あり。部屋は根津界限を見晴らす二階、永井荷風氏の日和下駄に書かれたると同じ部屋にあらずやと思う。その頃の先生は面の色日に焼け、如何にも軍人らしき心地したれど、謹厳などと云う堅苦しきは覺えず。英雄崇拜の念に充ち満ちたる我等には、快活なる先生とのみ思われたり。

又夏日先生の御葬式の時、青山斎場の門前の天幕に、受付を勤めし事ありしが、霜降の外套に中折帽をかぶりし人、わが前へ名刺をさし出したり。その人の顔の立派なる事、神彩ありとも云うべきか、滅多に世の中にある

顔ならず。名刺を見れば森林太郎とあり。おや、先生だ
ったかと思ひし時は、もう齋場へ入られし後なりき。そ
の時先生を見誤りしは、当時先生の面の色黒からざりし
為なるべし。当時先生は陸軍を退かれ、役所通いも止め
られしかば、日に焼けらるる事もなかりしなり。(未定
稿)

岩野泡鳴氏

何でも秋の夜更けだった。

僕は岩野泡鳴氏と一しよに、巣鴨行の電車に乗っていた。泡鳴氏は昂然と洋傘の柄にマントの肘をかけて、例の如く声高に西洋草花の栽培法だの氏が自得の健胃法だのをいろいろ僕に話してくれた。

その内にどう云う拍子だったか、話題が当時評判だった或小説の売れ行きに落ちた。すると泡鳴氏は傍若無人に、

「しかし君、新進作家とか何とか云ったって、そんなに本は売れやしないだろう。僕の本は大抵——部売れるが、君なんぞは一体何部位売れる？」と云った。

僕は聊か恐縮しながら、止むを得ず「傀儡師」の売れ高を答えた。

「皆そんなものかね？」

泡鳴氏は更に追求した。

僕よりも著書の売高の多い新進作家は大勢ある。――

僕は二三の小説を挙げて、僕の仄聞する売高を答えた。

それらは不幸にも氏の著書より、多数は売行きが好いに違いなかった。

「そうかね。存外好く売れるな。」

泡鳴氏は一瞬間、不審そうに顔を曇らせた。が、それ

は文字通り、一瞬間に過ぎなかつた。僕がまだ何とも答えない内に、氏の眼には忽ち前のような潑刺たる光が還つて来た。と同時に泡鳴氏は恰も天下を憐れむが如く、悠然とこう云い放つた。

「尤も僕の小説はむずかしいからな。」

詩人、小説家、戯曲家、評論家、——それらの資格は余人がきめるが好い。少くとも僕の眼に映じた我岩野泡鳴氏は、殆ど荘嚴な気がする位、愛すべき楽天主義者だつた。

谷崎潤一郎氏

僕は或初夏の午後、谷崎氏と神田をひやかしに出かけた。谷崎氏はその日も黒背広に赤い襟飾りを結んでいた。僕はこの壮大なる襟飾りに、象徴せられたるロマンティックシズムを感じた。尤もこれは僕ばかりではない。往来の人も男女を問わず、僕と同じ印象を受けたのである。すれ違ふ度に谷崎氏の顔をじろじろ見ないものは一人もなかった。しかし谷崎氏は何と云つてもそう云う事実を認めなかった。

「ありや君を見るんだよ。そんな道行きなんぞ着ているから。」

僕は成程夏外套の代りに親父の道行きを借用していた。が、道行きは茶の湯の師匠も菩提寺の和尚も着るものである。衆俗の目を駭かすことは到底一輪の紅薔薇に似た、非凡なる襟飾りに及ぶ筈はない。けれども谷崎氏は僕のようにロジックを尊敬しない詩人だから、僕も亦強いてこの真理を呑みこませようとも思わなかった。

その内に僕等は裏神保町の或カツフエへ腰を下した。何でも喉の渴いたため、炭酸水か何か飲みにはいったの

である。僕は飲みものを注文した後も、つらつら谷崎氏の喉もとに燃えたロマンティシズムの烽火を眺めていた。すると白粉の剥げた女給が一人、両手にコップを持ちながら、僕等のテエブルへ近づいて来た。コップは真理のように澄んだ水に細かい泡を躍らせていた。女給はそのコップを一つづつ、僕等の前へ立て竝べた。それから、——僕はまだ鮮かにあの女給の言葉を覚えてる！ 女給は立ち去り難いようにテエブルへ片手を残したなり、しげしげと谷崎氏の胸を覗きこんだ。

「まあ、好い色のネクタイをしていらっしやるわねえ。」

十分の後、僕はテエブルを離れる時に五十銭のティップを渡そうとした。谷崎氏はあらゆる東京人のように無用のティップをやることに軽蔑を感ずる一人である。この時も勿論五十銭のティップは谷崎氏の冷笑を免れなかった。

「何も君、世話にはならないじゃないか？」

僕はこの先輩の冷笑にも恥じず、皺だらけの札を女給へ渡した。女給は何も僕等の為に炭酸水を運んだばかりではない。又実に僕の為には赤い襟飾りに関する真理を天下に挙揚してくれたのである。僕はまだこの時の五十

錢位誠意のあるティップをやったことはない。

佐藤春夫氏

佐藤春夫は不幸にも常に僕を誤解している。僕の「有島生馬君に与う」を書いた時、佐藤は僕にこう云った「君はいつもああ云う風にももの云えば好いのだ。あれは旗幟鮮明で好い」僕はいつも旗幟鮮明である。まだ一度も莫迦だと思ふ君子に、聰なるかな、明なるかななどと云つたことはない。唯莫迦だと云わないだけである。それを

旗幟不鮮明のように思うのは佐藤の誤解と云わなければならぬ。

又僕の「保吉の手帳」を書いた時、佐藤は僕にこう云った、「うん、あれは好いよ。唯僕に云わせれば、未完成の美を認めないのは君の為に遺憾だと思ふね」これも佐藤の誤解である。僕は未完成の美に冷淡ではない。さもなければ何も僕のように、恬然と未完成の作品ばかり発表する気にはなれぬ訳である。

又僕の何かの拍子に「喜劇を書きたい」と云った時、佐藤は僕にこう云った。「喜劇ならば君にはすぐ書ける

だろう」僕のテムペラメントは厳肅である。全精神を振
い起さなければ滅多に常談も云うことは出来ない。それ
を佐藤は世間と共に容易の業のように誤解している。

又或新進の豪傑の佐藤を褒め、僕を貶した時、佐藤は
僕にこう云う手紙をよこした。「僕は君と比較されるの
を甚だ迷惑に思っている」これも亦誤解と云わなければ
ならぬ。僕はまだ一篇の琴唄の作者を新進の豪傑と同程
度の頭腦の持ち主と思つたことはない。尤もそう云う佐
藤の厚意に感謝したことは勿論である。

又震災後に会つた時、佐藤は僕にこう云つた。「銀座

の回復する時分には二人とも白髪になっているだろうなあ」これは佐藤の僕に対して抱いた、最も大いなる誤解である。いつか裸になったのを見たら、佐藤は詩人には似合わしからぬ、堂々たる体格を具えていた。到底僕は佐藤と共に天寿を全うする見込みはない。醜悪なる老年を迎えるのは当然佐藤春夫にのみ神々から下された宿命である。

久保田万太郎氏

僕の知れる江戸っ児中、文壇に縁あるものを尋ねれば第一に後藤末雄君、第二に辻潤君、第三に久保田万太郎君なり。この三君は三君なりにいずれも性格を異にすれども、江戸っ児たる風采と江戸っ児たる気質とは略一途に出ずるものの如し。就中後天的にも江戸っ児の称を曠うせざるものを我久保田万太郎君と為す。少くとも「のて」の臭味を帯びず、「まち」の特色に富みたるものを我久保田万太郎君と為す。

江戸っ児はあきらめに住するものなり。既にあきらめに住すと云う、積極的に強からざるは弁ずるを待たず。久保田君の芸術は久保田君の生活と共にこの特色を示すものと云うべし。久保田君の主人公は常に道德的薄明りに住する閩巷無名の男女なり。是等の男女はチエホフの作中にも屢その面を現せども、チエホフの主人公は我等読者を哄笑せしむること少しとなさず。久保田君の主人公はチエホフのそれよりも哀婉なること、なお日本の刻み煙草のロシアの紙巻よりも柔かなるが如し。のみならず作中の風景さえ、久保田君の筆に上るものは常に瀟洒

たる淡彩画なり。更に又久保田君の生活を見れば、――
僕は久保田君の生活を知ること、最も膚浅なる一人ならん。然れども君の微笑のうちには全生活を感じることなきにあらず。微笑とは久米正雄君の日本語彙に加えた新熟語なり。久保田君の時に浮ぶる微笑も微笑と称するを妨げざるべし。唯僕をして云わしむれば、これを微笑と称するの或は適切なるを思わざる能わず。

既にあきらめに住すと云う。積極的に強からざるは弃ずるを待たず。然れども又あきらめに住すほど、消極的に強きはあらざるべし。久保田君をして一たびあきらめ

しめよ。楨でも棒でも動くものにあらず。談笑の間もなお然り。酔うて虎となれば愈然り。久保田君の主人公も、常にこの頑固さ加減を失う能わず。これ又チエホフの主人公と、面目を異にする所以なり。久保田君と君の主人公とは、撓めんと欲すれば撓むることを得れども、折ることは必しも容易ならざるもの、——たとえば、雪に伏せる竹と趣を一にすと云うを得べし。

この強からざるが故に強き特色は、江戸っ児の全面たらざるにもせよ、江戸っ児の全面に近きものの如し。僕は先天的にも後天的にも江戸っ児の資格を失いたる、東

京育ちの書生なり。故に久保田君の芸術的並びに道德的態度を悉理解すること能わず。然れども君の小説戯曲に敬意と愛とを有することは必しも人後に落ちざるべし。即ち原稿用紙三枚の久保田万太郎論を草する所以なり。久保田君、幸いに首肯するや否や？　もし又首肯せざらん乎。——君の一たび抛下すれば、楯でも捧でも動かざるは既に僕の知る所なり。僕亦何すれぞ首肯を強いんや。僕亦何すれぞ首肯を強いんや。

因に云う。小説家久保田万太郎君の俳人傘雨宗匠たるは天下の周知する所なり。僕、曩日久保田君に「うすう

すと曇りそめけり星月夜」の句を示す。傘雨宗匠善と称す。数日の後、僕前句を改めて「冷えびえと曇り立ちけり星月夜」と為す。傘雨宗匠頭を振って曰、「いけません」然れども僕畢に後句を捨てず。久保田君亦畢に後句を取らず。僕等の差を見るに近からん乎。

小杉未醒氏

一 昨年の冬、香取秀真氏が手賀沼の鴨を御馳走した時、其処に居合せた天岡均一氏が、初対面の小杉未醒氏に、

「小杉君、君の画は君に比べると、如何にも優しすぎるじゃないか」と、いきなり一拶を与えた事がある。僕はその時天岡の翁も、やはり小杉氏の外貌に欺かれているなど云う気がした。

成程小杉氏は一見した所、如何にも天狗倶楽部らしい、勇壮な面目を具えている。僕も實際初対面の時には、突兀たる氏の風采の中に、未醒山人と名乗るよりも、寧ろ未醒蛮民と号しそうな辺方瘴煙の気を感じたものである。が、その後氏に接して見ると、——接したと云う程接しもしないが、兎に角まあ接して見ると、肚の底は見

かけよりも、遙に細い神経のある、優しい人のような気がして来た。勿論今後猶接して見たら、又この意見も変わるかも知れない。が、差当り僕の見た小杉未醒氏は、気の弱い、思いやりに富んだ、時には毛嫌いも強そうな、我々と存外縁の近い感情家肌の人物である。

だから僕に云わせると、氏の人物と氏の画とは、天岡の翁の考えるように、ちぐはぐな所がある訳ではない。氏の画はやはり竹のように、本来の氏の面目から、まっすぐに育って来たものである。

小杉氏の画は洋画も南画も、同じように物柔かである。

が、決して軽快ではない。何時も妙に寂しそうな、薄ら寒い影が纏わっている。僕は其処に僕等同様、近代の風に神経を吹かれた小杉氏の姿を見るような気がする。取った形容を用いれば、梅花書屋の窓を覗いて見ても、氏の唐人は気楽そうに、林処士の詩などは謡っていない。しみじみと独り炉に向って、*Rêvons …… le feu s'allume* とか何とか考えていそうに見えるのである。

序ながら書き加えるが、小杉氏は詩にも堪能である。が、何でも五言絶句ばかりが、総計十首か十五首しかない。その点は僕によく似ている。しかし出来映えを考え

れば、或は僕の詩よりうまいかも知れない。勿論或はま
ずいかも知れない。

近藤浩一路氏

近藤君は漫画家として有名であつた。今は正道を踏ん
だ日本画家としても有名である。

が、これは偶然ではない。漫画には落想の滑稽な漫画
がある。画そのものの滑稽な漫画がある。或は二者を兼
ねた漫画がある。近藤君の漫画の多くは、この二者を兼

ねた漫画でなければ、画そのものの滑稽な漫画であった。唯、威儀を正しささえすれば、一頁の漫画が忽ちに、一幅の山水となるのは当然である。

近藤君の画は枯淡ではない。南画じみた山水の中にも、何処か肉の臭いのする、しつこい所が潜んでいる。其処に芸術家としての貪婪が、あらゆるものから養分を吸収しようとする欲望が、露骨に感ぜられるのは愉快である。

今日の流俗は昨日の流俗ではない。昨日の流俗は、反抗的な一切に冷淡なのが常であった。今日の流俗は反抗的ならざる一切に冷淡なのを常としている。二種の流俗

が入り交った現代の日本に処するには、——近藤君もし
っかりと金剛座上に尻を据えて、死身に修業をしなけれ
ばなるまい。

近藤君に始めて会ったのは、丁度去年の今頃である。
君はその時神経衰弱とか号して甚意気が昂らなかつた。
が、殆丸太のような桜のステッキをついていた所を見る
と、いくら神経衰弱でも、犬位は撲殺する余勇があつた
のに違いない。が、最近君に会った時、君は神経衰弱も
癒ったとか云つて、甚元氣らしい顔をしていた。健康も
恢復したのには違いないが、その間に君の名声が大いに

挙り出したのも事実である。自分はその時君と、小杉未醒氏の噂を少々した。君はいが栗頭も昔の通りである。書生らしい容子も、以前と変っていない。しかしあの丸太のような、偉大なる桜のステッキだけは、再び君の手に見られなかった。――

恒藤恭氏

恒藤恭は一高時代の親友なり。寄宿舎も同じ中寮の三番室に一年の間居りし事あり。当時の恒藤もまだ法科に

はいらず。一部の乙組即ち英文科の生徒なりき。

恒藤は朝六時頃起き、午の休みには昼寝をし、夜は十
一時の消灯前に、ちゃんと歯を磨いた後、床にはいるを
常としたり。その生活の規則的なる事、エマヌエル・カ
ントの再来か時計の振子かと思う程なりき。当時僕等の
クラスには、久米正雄の如き或は菊池寛の如き、天縦の
材少なからず、是等の豪傑は恒藤と違い、酒を飲んだり
ストオムをやったり、天馬の空を行くが如き、或は乗合
自動車の町を走るが如き、放縦なる生活を喜びしものな
り。故に恒藤の生活は是等の豪傑の生活に対し、規則的

なるよりも一層規則的に見えしなるべし。僕は恒藤の親友なりしかど、到底彼の如くに几帳面なる事能わず、人並みに寝坊をし、人並みに夜更かしをし、凡庸に日を送るを常としたり。

恒藤は又秀才なりき。格別勉強するとも見えざれども、成績は常に首席なる上、仏蘭西語だの羅匈語だの、いろいろのものを修業しいたり。それから休日には植物園などへ、水彩画の写生に出かけしものなり。僕もその御伴を仰せつかり、彼の写生する傍らに半日本を読みし事も少からず。恒藤の描きし水彩画中、最も僕の記憶にある

ものは冬枯れの躑躅を写せるものなり。但し記憶にある所以は不幸にも画の妙にあらず。躑躅だと説明される迄は牛だとばかり思っていた故なり。

恒藤は又論客なりき。——その前にもう一つ書きたき事は恒藤も詩を作れる事なり。当時僕等のクラスには詩人歌人少からず。「げに天才の心こそカメレオンにも似たりけれ」と歌えるものは当時の久米正雄なり。「教室の机によれば何となく怒鳴って見たい心地するなり」と歌えるものは当時の菊池寛なり。当時の恒藤に数篇の詩あるも、亦怪しむを要せざるべし。その一篇に云う。

かみはつねにうゑにみてり
いのちのみをそのにまきて
みのれるときむさぼりくふ
かみのうゑのゆゑによりて
かみのみなをほめたたふや
はかなきみをむすべるもの

もう一度新たに書き出せば、恒藤は又論客なり。僕は爾来十余年、未だ天下に彼の如く恐るべき論客あるを知らず。若し他に一人を数うべしとせば、唯兎島喜久雄君あるのみ。僕は現在恒藤と会うも、滅多に議論を上下せ

ず。上下すれば負ける事をちやんと心得ている故なり。されど一高にいた時分は、飯を食うにも、散歩をするにも、のべつ幕なしに議論をしたり。しかも議論の問題となるものは純粹思惟とか、西田幾太郎とか、自由意志とか、ベルグソンとか、むずかしい事ばかりに限りしを記憶す。僕はこの論戦より僕の論法を発明したり。聞説す、かのガリヴァアの著者は未だ論理学には熟せざるも、議論は難からずと傲語せしと。思うにスヰフトも親友中には、必恒藤恭の如き、辛辣なる論客を有せしなるべし。

恒藤は又謹嚴の士なり。酒色を好まず、出たらめを云

わず、身を処するに清白なる事、僕などとは雲泥の差なり。同室同級の藤岡蔵六も、やはり謹厳の士なりしが、これは謹厳すぎる憾なきにあらず。「待合のフンクテイオネンは何だね？」などと屢僕を困らせしものはこの藤岡蔵六なり。藤岡にはコオエンの学説よりも、待合の方が難解なりしならん。恒藤はそんな事を知らざるに非ず。知って而して謹厳なりしが如し。しかもその謹厳なる事は一言一行の末にも及びたりき。例えば恒藤は寮雨をせず。寮雨とは夜間寄宿舎の窓より、勝手に小便を垂れ流す事なり。僕は時と場合とに応じ、寮雨位辞するものに

非ず。僕問う。「君はなぜ寮雨をしない？」恒藤答う。
「人にされたら僕が迷惑する。だからしない。君はなぜ寮雨をする？」僕答う。「人にされても僕は迷惑しない、だからする。」恒藤は又賄征伐をせず。皿を破り飯櫃を投ぐるは僕も亦能くせざる所なり。僕問う。「君はなぜ賄征伐をしない？」恒藤答う。「無用に器物を毀すのは悪いと思うから。——君はなぜしない？」僕答う。「しないのじゃない、出来ないのだ。」

今恒藤は京都帝国大学にシユタムラアとかラスクとかを講じ、僕は東京に文を売る。相見る事一年に一兩度の

み。昔一高の校庭なる菩提樹下を逍遙しつつ、談笑して倦まざりし朝暮を思えば、懐旧の情に堪えざるもの多し。即ち改造社の囑に応じ、立ちどころにこの文を作る。時に大正壬戌の年、黄花未だ発せざる重陽なり。

島木赤彦氏

島木さんに最後に会ったのは確か今年（大正十五年）の正月である。僕はその日の夕飯を斎藤さんの御馳走になり、六韜三略の話だの早発性痴呆の話だのをした。御

馳走になった場所は外でもない。東京駅前の花月である。それから又斎藤さんと割り合にすいた省線電車に乗り、アララギ発行所へ出かけることにした。僕はその電車の中にどこか支那の少女に近い、如何にも華奢な女学生が一人坐っていたことを覚えている。

僕等は発行所へはいる前にあの空嚢を山のように積んだ露路の左側へ立ち小便をした。念の為に断って置くが、この発頭人は僕ではない。僕は唯先輩たる斎藤さんの高教に従ったのである。

発行所の下の座敷には島木さん、平福さん、藤沢さん、

高田さん（？）、古今書院主人などが車座になって話していた。あの座敷は善く言えば蕭散としている。お茶うけの蜜柑も太だ小さい。僕は殊にこの蜜柑にアララギらしい親しみを感じた。（尤も胃酸過多症の為に一つも食べなかつたのは事実である。）

島木さんは大分憔悴していた。従って双目だけ大きい気がした。話題は多分刊行中の長塚節全集のことだったであろう。島木さんは談の某君に及ぶや、苦笑と一しよに「下司ですなあ」と言った。それは「下」の字に力を入れた、頗る特色のある言いかただった。僕は某君には

会ったことは勿論、某君の作品も読んだことはない。しかし島木さんにこう言われると、忽ち下司らしい気がし出した。

それから又島木さんは後ろ向きに坐ったまま、ワイシヤツの裾をまくり上げ、医学博士の斎藤さんに神経痛の注射をして貰った。(島木さんは背広を着ていたからである。)二度目の注射は痛かったらしい。島木さんは腰へ手をやりながら、「斎藤君、大分こたえるぞ」などと常談のように声をかけたりした。この神経痛と思っただものが実は後に島木さんを殺した癌腫の痛みに外ならなか

ったのである。

二三箇月たった後、僕は土屋文明君から島木さんの訃を報じて貰った。それから又「改造」に載った斎藤さんの「赤彦終焉記」を読んだ。斎藤さんは島木さんの末期を大往生だったと言っている。しかし当時も病気だった僕には少からず愴然の感を与えた。この感銘の残っていたからであろう。僕は明けがたの夢の中に島木さんの葬式に参列し、大勢の人人と歌を作ったりした。「まなこつぶらに腰太き柿の村びと今はあらずも」——これだけは夢の覚めた後もはつきりと記憶に残っていた。上の五

文字は忘れたのではない。恐らくは作らずにしまったのである。僕はこの夢を思い出す度に未だに寂しい気がしてならないのである。

魂はいづれの空に行くならん我に用なきことを思ひ
居り

これは島木さんの述懐ばかりではない。同時に又この文章を書いている病中の僕の心もちである。(十五・九
・二)

滝田哲太郎氏

滝田君はいつも肥っていた。のみならずいつも赤い顔をしていた。夏目先生の滝田君を金太郎と呼ばれたのも当らぬことはない。しかしあの目の細い所などは寧ろ菊慈童にそっくりだった。

僕は大学に在学中、滝田君に初対面の挨拶をしてから、ざっと十年ばかりの間可也親密につき合っていた。滝田君に鮭鮓の御馳走になり、烈しい胃痙攣を起したこともある。又雲坪を論じ合った後、蘭竹を一幅貰ったこともある。

ある。実際あらゆる編輯者中、僕の最も懇意にしたのは正に滝田君に違いなかった。しかし僕はどういふ訳か、未だ嘗て滝田君とお茶屋へ行つたことは一度もなかった。滝田君は恐らくは僕などは話せぬ人間と思つていたのであろう。

滝田君は熱心な編輯者だった。殊に作家を煽動して小説や戯曲を書かせることには独特の妙を具えていた。僕なども始終滝田君に僕の作品を褒められたり、或は又苦心の余になつた先輩の作品を見せられたり、いろいろ鞭撻を受けた為にいつの間にかざつと百ばかりの短篇小説

を書いてしまった。これは僕の滝田君に何よりも感謝したいと思うことである。

僕は又中央公論社から原稿料を前借する為に時々滝田君を煩わした。何でも始めに前借したのは十円前後の金だったであろう。僕はその金にも困った揚句、確か夜の八時頃に滝田君の旧宅を尋ねて行った。滝田君の旧居は西片町から菊坂へ下りる横町にあった。僕はこの家を探ねたことは前後にたった一度しかない。が、未だに門内か庭かに何か白い草花の沢山咲いていたのを覚えてい

滝田君は本職の文芸の外にも書画や骨董を愛していた。僕は今人の作品の外にも、椿岳や雲坪の出来の善いものを幾つか滝田君に見せて貰った。勿論僕の見なかつたものにもまだ逸品は多いであろう。が、僕の見た限りでは滝田コレクションは何と言つても今人の作品に優れていて。尤も僕の鑑賞眼は頗る滝田君には不評判だった。「どうも芥川さんの美術論は文学論ほど信用出来ないからなあ。」——滝田君はいつもこう言つて僕をあき盲を嗤つていた。

滝田君が日本の文芸に貢献する所の多かつたことは僕

の贅するのを待たないであろう。しかし当代の文士を挙げて滝田君の世話になったと言うならば、それは故人に倂するとも、故人に信なる言葉ではあるまい。成程僕等年少の徒は度たび滝田君に厄介をかけた。けれども滝田君自身も亦恐らくは徳田秋声氏の如き、或は田山花袋氏の如き、僕等の先輩に負う所の少しもない訳ではなかつたであろう。

僕は滝田君の訃を聞いた夜、室生君と一しよに悔みに行った。滝田君は所謂観魚亭に北を枕に横わっていた。僕はその顔を見た時に何とも言われぬ落莫を感じた。そ

れは僕に親切だった友人の死んだ為と言うよりも、況や僕に寛大だった編輯者の死んだ為と言うよりも、寧ろ唯あの滝田君と言う、大きい情熱家の死んだ為だった。僕は中陰を過ごした今でも滝田君のことを思い出す度にまだこの落莫を感じている。滝田君ほど熱烈に生活した人は日本には滅多にいないのかも知れない。

日本文学電子図書館

人物記

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：「梅・馬・鶯」

新潮社

大正15年12月21日 印刷

大正15年12月27日 発行



日本文学電子図書館